

## 近世における老子の注釈・刊行

高 瀬 允

徳川期にあって、儒学の盛行は、多くの邦人学者の手になる注釈を生み出しているが、儒家以外の諸子の書が多く読まれていたことも特色の一つである。更にそれらの注の刊本が多出していることは前代までの漢籍の読まれ方と比べて、読書人口の増大という点で飛躍的な発展と見るべきである。もちろん、当時の出版事情は今日とは比較にならず、発行部数も三百部ぐらいのものであったろうし、刊行の志を待ちながら、資金等の面で果し得なかった学者も多かったと思われる。

しかしまた、後述するように、寛文頃からの書籍目録によれば、かなりの数の老子注釈書を見ることができる。いま、それらを中心に、年代順に大観して、老子受容の流れを考察して見たいと思う。

年表作成にあたっては、慶応大学―斯道文庫目録、岩波版―国書総目録、徳川時代出版者出版物集覧（矢島玄亮著）、日本老子書目録（台湾大学、嚴靈峯）によって配列を試みたが、成立の年代が不明のものが多く、特に写本の場合は、その著者の歿年までに成立したと見るより外はないので、そのように表記した。

年表の初期に見られる林希逸註について言えば、林希逸の老子口義二巻は一二六〇年の作である。福清の人、字は肅翁、その居室を鷹齋と称したので、この書を「鷹齋口義」という。武内義雄氏は言う。「林希逸の老子口義は 景定年間に完成された新註で、老子を莊子から引離して、儒教と結びつけようとした本である。」「林希逸註が我が国に渡来したのは恐らく禅僧の渡来に因る外はないであろうからこれこそ禅僧によって我が国の老莊学が改革せられた一つの実証であろう。」

この口義に本づいて、最初の注釈をしたのは小野壺である。丹波の人で水戸侯の侍講であった。寛文十年歿。

林註については林道春（羅山）が何と言っても普及の功労者である。羅山が家康に召されたのは、慶長八年（一六〇三）のこととされるが、以来幕府初期の文教政策の大きな柱となつて活躍し、和訓を施した書籍の数は甚だ多い。老子についてだけでも、老子鷹齋口義批點、道春老子経抄、道春首書老子経、老子抄（老子抄解）と多い。このうち、批點は倭訓を傍に付したものの、首書は後に頭書とも呼ばれているが附点は徳倉昌堅の施したもので尚堅考となっている。

道春の頃までに、我が国に将来された漢土の注は、李道純の道德会元（一二九〇年頃）、焦竑の老子翼（一五八七）、何道全（無垢子と号す）全真教の道士にして明洪武初年に卒）の老子道德経述註（一三六七頃まで）釈徳清の道德経解（一五四六）等が数えられるが、前田家の尊経閣文庫には、王道の老子億（一五六六）が入っており、いわゆる新刊の書を購求せしめた好学の大名は他にもあったであろう。ちょっと変っているのは、明暦三年（一六五七）に來日して、寛文十一年（一六七一）に歿した僧即非である。明福清の人で原姓は林、自ら林希逸の子孫と称した黄檗宗の僧である。來日して林註の盛行に刺激されたのであろう。同じく來日の陳元贊（一六一九來日）は河上公註に本づいて老子経通考を書いている。これは林註の盛行に一矢を報いるつもりがあったであらう。

山本泰順（洞雲）、榊原玄輔（篁州）の諺解大成がほとんど同時期に出ているが、これは一つの傾向を示すものと見る事ができる。つまり諺解、俚解といった書名が示すように邦人学者による独自の理解度が、日本語を用いることによって明らかにされて来たことである。そこには日本的な受容の仕方も当然見ることができようし、一方、老子読解の深化も見ることができよう。

羅山はもちろん、程朱学派の筆頭に位するが、山本洞雲は松永尺五・宇都宮遯庵と学統をつぐ程朱学派、一方の榊原篁州は木下順庵門であるが折衷学派の祖とされる人物である。元禄から享保期を迎える頃になって、程朱学派の分化、多様化が見られ、それは徂徠の出現によって一層鮮明である。いま元禄期までを一区切りとして林希逸の盛行時代と見ておくことにしたい。

## 二

徂徠は「護国十筆」の中で言う。「老子濁り超然として以て礼楽の源を見ることがあり。然れども生まれること聖王の時に遭はず、その才を用ふる所なし。故に書を為りて以て後世に詔ぐ。然ればこれ廼ち王者の事なり。」また「老子の書はもと天下を治むるの道を語るなり。」これらの語は老子に対する批判をふくみながらも、彼の学説に有用の契機を与える人物として見ていたことを示すものである。そしてその学問の実証的性格から、彼が諸子の研究を唱道したことは当然その門流に多くの老子の註釈を生み出させた。武内義雄氏は徂徠学派の人々によって作られた註釈を次のように列記する。老子特解（太宰春台） 老子愚読（渡辺蒙庵） 老子類説（片山兼山） 老子考（萩原大麓） 老子攷（萩原嵩岳） 諸子大意（萩原西隣） 老子考注（久保筑水） 諸子解義（松下葵岡） 老子解（重野櫟軒） 老子国字解（太田子龍） 老子考（亀井昭陽） 老子摘解、析玄（広瀬淡窓） 老子国字解（海保青陵） 校刻王注老子（宇佐美藩水（校刻王注老子） 読老子正訓（戸崎淡園） 老子考文（市川鶴鳴） 老莊考（伊藤雨村） 老子古解（岳鸞） 蒙注老子（冢田大峰） （以上は岩波文庫「老子」一四二頁、原型は学統を図示して人名の下部に書名をあげてある）△印を付した人物は服部南郭門に属させているがこれは別派とすべきであろう。儒学系統図では古注学の項に秋山玉山門とする。片山兼山・萩原大麓・萩原西隣となり、松下葵岡は大麓と並ぶのである。

また武内氏の遺漏と思われるものに南郭門の齋宮必簡（老子賢語）必簡の門人、三野元密（老子経古義）同じく南郭門の滝鶴台（老子抄）がある。この他にも学統を明らかにしない人物がいるから（例

帆丘板倉、金蘭齋）数が増すことは当然考えられる。これらの著作の刊行は年表に見るごとくであるが寛延、宝暦頃から始まって幕末に及ぶ。太宰春台の「老子特解」二巻は天明三年、江都書肆松本善兵衛、須原屋平助、小林新兵衛の刊行であるが、春台は延享四年に六八歳で歿し、この書の下冊第三十二章以後は門人宮田明の続選である。春台死後の刊行であった。こうした例は少なくないであろう。

金蘭齋の「老子経国字解」三巻は長期にわたって刊行されたようである。明治刷まであった。つまりロングセラーの一つである。羽後の人。初め業を伊勢梅軒、西山季斎に受け、後伊藤仁齋の門に学ぶ。業成つて京師に徙居し、専ら老莊を講じて徒に授く。その人と為り飄逸にして奇行多し。然れどもその学を講ずるや頗る雄弁にしてよく人の願を解く。享保十六年二十四日歿す、年七十九（秋田県史―漢学者伝記著作大事典）つまり蘭齋は古義学派となるのであるが、次のような説もある。「南冥先生門人に懶齋といへる才子あり。世に氣違ひ懶齋といふ是也」（老婆心話―藤堂龍山）南冥は亀井南冥で徂徠門下の山縣周南の門人である。さすれば徂徠学とも関連があつたといふことになるが南冥より蘭齋は三十歳の余も年長であるから疑問もあるのである。ともかく金蘭齋は「老莊の道をよく学びたる人」（問思隨筆―加藤景範）であつて、老莊の思想を実生活に發揮したのであつた。「近世畸人伝」に収められたのもその為である。

徂徠学派の特色の一つは老子本文の考定である。宇佐美恵の校刻王注老子をはじめとして市川鶴鳴の老子考定一卷等がある。

林註が顧みられなくなつて王註が用いられ更に本文の精確を求める態度は清朝の考證学の流行と無縁ではない。

徂徠とその門流の著作はこのように多数に上るが、徂徠派だけが註釈をしているわけではない。程朱学派に属する人々もまた多いの

であり、更に折衷学派、考証学派もある。文化・文政を中心とする時期は各派入り乱れて壯觀である。老子の思想がどこかで日本的なあきらめの境地を正当化し、無為が封建体制内の処世態度に通じるものがあつたと思われる。しかし、老子思想のとりえ方は儒学への援用であつた。岳鸞（大竹鸞）の老子古解などもそうである。儒道仏の三教の交流、相克は古くからの論題であるが、江戸期では心学の勃興が示すように融和の方向をとり、儒学中心の教学体系へ寄与すべきものと見なされたのであろう。そういう中では金蘭齋などは出色で、老子の注釈には以来この系列が存在するようになる。鈴木文台（明治三年歿七五）は越後の人で独学であつたというが「老子集成」がある。明治以後で言えば軍人などで老子を註する人があつたのと似ている。沢庵は正保二年に歿しているから本年表では初期の人であるがその老子講話は明治四十三年になつて刊行された。旧題は「老子鈔」刊本はそれまでないようである。これなどは仏家の見地とは言うものの当時刊行されていれば相当の反響があつたに相違ない。

### 三

折衷学派、古注学派について一覽する。

。井上金峨―兼子天璽

亀田鵬齋―仁科白谷

。井上金峨―山本北山……………佐藤牧山

。広瀬淡窓

。宇野明霞―片山北海……………葛西因是

……………土井蠡牙

。中井履軒

。皆川淇園 — 大田錦城 — 中井乾齋  
 松本愚山 — 大田晴軒  
 東条一堂

。冢田大峯

。秋山玉山 — 片山兼山 — 角田青溪  
 久保 愛  
 萩原大麓 (前述)

右の中には老子註釈に関係のない人名もあるが学統を示す為に出したのである。折衷学派と云い、古注学派と言ってもその間に明確な区別があるわけではない。たとえば大田錦城は考証学派を開いてその祖となるようなものである。化政期の自由さがうかがわれるのである。

その註釈は次のようである。(これは前出武内氏のをかなり増補する要があるう)

老子折中 (兼子天璽)  
 老子愚説、老莊摺解 (龜田鵬齋)  
 老子解 (仁科白谷)  
 老莊抄解 (土井轟牙)  
 老子妙激 (大田錦城)  
 老子全解 (大田晴軒)  
 老子幅註 (葛西因是)  
 老子雕題 (中井履軒)  
 老子詳解 (中井乾齋) 中江とあるのは誤  
 老子王註標識 (東条一堂)  
 老子評注 (松本愚山)

老子解 (久保愛)

老子釋解 (皆川淇園)

老子翼解 (角田青溪)

老子解 (金子有斐) …… 皆川門

老子講義 (佐藤牧山)

大田晴軒は錦城の第三子で「老子全解」は「邦人の老子注中の白眉」

(武内氏)とされる。たしかに精微を極めた述作であり莊子との対照が甚だ多い。後年の註釈書で某氏のもの等殆どこれに依拠している。東条一堂の王註標識は前出の字佐美恵の王注老子の欄外に記入したものである。佐藤牧山の老子講義は明治になつての刊行であるが流行したものの中で今日でもよく見かけられる。金子有斐は加賀藩の儒学であつて三都とあまり交渉はない。そういう地方文人の述作はこの頃からかなり増えて来ているのではないかと思われる。地方文人の研究が進むにつれて各地の埋れた述作が出て来る可能性がある。老子註釈の態度については徂徠学派の場合と同じであつて、これは程朱学派にしても変りはない。たとえば仁科白谷の「老子解」二卷は孔老一致の旨を以て解し、八十一章の首句を取つて章名とする。馬淵嵐山(会通)一七五五—一八三六は学派を詳かにしないが老子賢語二卷(又は老子賢、老子賢訳、老子賢話)の著作があるが仮名交り文で解説し孔老一致の主旨を述べている。

#### 四

宝暦四年の「新增書籍目録」には奇談の部として「夢中老子、都老子、老子形氣」の三書がある。「老子形氣」は新井白蛾の著であつて別に老子随筆とも称したようである。老子思想に関する随想である。もともと白蛾は平易に説いた解説書の多い人である。この種

の著作は他にもっとあったであろう。

国字解、国字辯という書名が多く目につくが印刷発達史の上で書名の流行という現象をあらわしている。この国字解という名は大正までであった。（漢籍国字解）

僧侶の述作も散見するが、注目すべきは徳川斉昭と平田篤胤である。どちらも未見なので詳細は後日にまつが、由来国学者は老荘に好意的である。真淵、宣長然りであるから篤胤が註釈をものするのは不思議はない。徳川斉昭のは興味がある。その他年表中にある著作で気になるものが多いが、披見の機を得次第、比較考究したい。

写本については今日では重立ったものはほとんど刊行されているので、註釈の異色というようなのは今後あまり出ることはないであろう。いまは刊本の当時の読まれかたが問題なのであるが、既に見て来たように江戸の初期と中後期でははっきりことなる。林註は中期以後ではもはやすてられたも同然である。にもかかわらず刊本はかなり残存したのであるから読者も存在したのである。ただし中央の学界にあっては新しい風潮に全く支配されているかに見える。出版の盛行（後期の江戸の出版点数の増加は飛躍的である）に裏付けされた学問の流行はどの辺の読者を対象としどのように地方に滲透して行ったか、考えるべき問題は多いが、後考にまつことにして、この度は未定稿ながら年表を一応作って見た次第である。

江戸期老子注釈年表

一六二九 一六三〇 一六三一	寛永 八七六	○老子庸斎口義抄（小野壹また人見ト幽軒）	○印は刊本
一六三二 一六三三 一六三四 一六三五 一六三六	寛永 九〇 一一 一二 一三	○老子庸斎口義（京）林甚右エ門（林羅山の批点）	
一六三七 一六三八 一六三九 一四〇 一六四一			
一六四二 一六四三 一六四四 一六四五 一六四六 一六四七 一六四八 一六四九 一六五〇 一六五一	正保 二〇 慶安 四三二 元四三 元二		

一六五二	承応	〇道春老子經抄（崑山館刊）
一六五三		
一六五四		
一六五五	明曆	
一六五六		
一六五七		〇老子庸齋口義（京）上村次郎右エ門 標点は尚堅（道春首書老子經）
一六五八	万治	
一六五九		
一六六〇	寛文	
一六六一		
一六六二		〇老子經（首書） “（道春点） “（無垢子註） 老莊翼註 寛文無刊記 書籍目錄
一六六三		
一六六四		〇點勘老子道德經口義（僧即非）
一六六五		
一六六六		
一六六七		〇老子道德經会元（三家元混）（京）吉野屋惣兵エ
一六六八		
一六六九		〇老子經（林註）頭書、無垢子註、無垢子抄、会元、義解、老子道德經（釈徳清注） 寛文一〇年刊 目錄
一六七〇		〇同上（林註）老子頭書増補（徳倉昌堅一尚堅） 寛文一一年刊 “
一六七一		老子經
一六七二	延宝	〇老子庸齋口義（京）上村次郎右エ門
一六七三		〇老子經口義 頭書、増補頭書、義解、直註（毛利貞齋）、無垢子註、河上公註、会元、 延宝三年刊 目錄
一六七四		抄、老子經諺解大成（榊原玄甫） “新増 “
一六七五		
一六七六		
一六七七		

一六七八	天和	一六八二	貞享	一六八七	元禄	一六九二	一七〇二
一六七九	元	一六八三	三	一六八八	四	一六九三	一七〇一
一六八〇	八	一六八四	二	一六八九	元	一六九四	一七〇〇
一六八一	七	一六八五	元	一六九〇	三	一六九五	一六九九
	六	一六八六	二	一六九一	二	一六九六	一六九八
						一六九七	一六九七
						一六九八	一六九八
						一六九九	一六九九
						一七〇〇	一七〇〇
						一七〇一	一七〇一
						一七〇二	一七〇二
						一七〇三	一七〇三

○老子経通考(陳元贊)(京)版木屋久兵衛 寛文一〇年の誤なるべし(庚戌)  
 ○老子経 〃首書 新版頭書増補 〃無垢子〃義解〃会元〃道德経 老莊翼註  
 老子経 〃山本洞雲(京)文台屋次郎兵衛  
 天和元年刊 書籍目録大会

○老子経詳義 老子諺解大成(楠原玄甫)

○老子経口義 〃頭書 義解 直註 無垢子註 河上公註 会元 抄  
 ○詳義 〃諺解大成(楠原玄甫) 元禄五年刊 目録

○口義、頭書、増補首書、義解、直註、無垢子註、河上公註、会元、  
 詳義、諺解大成、老莊翼註 書籍目録大全  
 ○老子経口義、頭書、増補頭書、義解、直註、無垢子註、河上公註、会元、  
 抄、詳義、諺解大成 元禄一二年 新版増補





一七五二	延享	一七四二	一七三〇	以下この欄の書名はおよそ成立年を示す。
一七五三	延享	一七四三	一七三一	
一七五四	延享	一七四四	一七三二	
一七五五	延享	一七四五	一七三三	
	延享	一七四六	一七三四	
	延享	一七四七	一七三五	
	延享	一七四八	一七三六	
	延享	一七四九	元文	
	延享	一七五〇	元文	
	延享	一七五一	元文	
	延享	元	元	
	延享	三	二〇	
	延享	二	一九	
	延享	元	一八	
	延享	四	一七	
	延享	三	一六	
	延享	二	一五	
	延享	元	一四	
	延享	五	一三	
	延享	四	一二	
	延享	三	一一	
	延享	二	一〇	
	延享	元	〇九	
	延享	一	〇八	
	延享	二	〇七	
	延享	三	〇六	
	延享	四	〇五	
	延享	五	〇四	
	延享	六	〇三	
	延享	七	〇二	
	延享	八	〇一	
	延享	九	〇〇	
	延享	一〇	九九	
	延享	一一	九八	
	延享	一二	九七	
	延享	一三	九六	
	延享	一四	九五	
	延享	一五	九四	
	延享	一六	九三	
	延享	一七	九二	
	延享	一八	九一	
	延享	一九	九〇	
	延享	二〇	八九	
	延享	二一	八八	
	延享	二二	八七	
	延享	二三	八六	
	延享	二四	八五	
	延享	二五	八四	
	延享	二六	八三	
	延享	二七	八二	
	延享	二八	八一	
	延享	二九	八〇	
	延享	三〇	七九	
	延享	三一	七八	
	延享	三二	七七	
	延享	三三	七六	
	延享	三四	七五	
	延享	三五	七四	
	延享	三六	七三	
	延享	三七	七二	
	延享	三八	七一	
	延享	三九	七〇	
	延享	四〇	六九	
	延享	四一	六八	
	延享	四二	六七	
	延享	四三	六六	
	延享	四四	六五	
	延享	四五	六四	
	延享	四六	六三	
	延享	四七	六二	
	延享	四八	六一	
	延享	四九	六〇	
	延享	五〇	五九	
	延享	五一	五八	
	延享	五二	五七	
	延享	五三	五六	
	延享	五四	五五	
	延享	五五	五四	
	延享	五六	五三	
	延享	五七	五二	
	延享	五八	五一	
	延享	五九	四〇	
	延享	六〇	三九	
	延享	六一	三八	
	延享	六二	三七	
	延享	六三	三六	
	延享	六四	三五	
	延享	六五	三四	
	延享	六六	三三	
	延享	六七	三二	
	延享	六八	三一	
	延享	六九	三〇	
	延享	七〇	二九	
	延享	七一	二八	
	延享	七二	二七	
	延享	七三	二六	
	延享	七四	二五	
	延享	七五	二四	
	延享	七六	二三	
	延享	七七	二二	
	延享	七八	二一	
	延享	七九	二〇	
	延享	八〇	一九	
	延享	八一	一八	
	延享	八二	一七	
	延享	八三	一六	
	延享	八四	一五	
	延享	八五	一四	
	延享	八六	一三	
	延享	八七	一二	
	延享	八八	一一	
	延享	八九	一〇	
	延享	九〇	〇九	
	延享	九一	〇八	
	延享	九二	〇七	
	延享	九三	〇六	
	延享	九四	〇五	
	延享	九五	〇四	
	延享	九六	〇三	
	延享	九七	〇二	
	延享	九八	〇一	
	延享	九九	〇〇	
	延享	一〇〇	九九	
	延享	一〇一	九八	
	延享	一〇二	九七	
	延享	一〇三	九六	
	延享	一〇四	九五	
	延享	一〇五	九四	
	延享	一〇六	九三	
	延享	一〇七	九二	
	延享	一〇八	九一	
	延享	一〇九	九〇	
	延享	一一〇	八九	
	延享	一一一	八八	
	延享	一一二	八七	
	延享	一一三	八六	
	延享	一一四	八五	
	延享	一一五	八四	
	延享	一一六	八三	
	延享	一一七	八二	
	延享	一一八	八一	
	延享	一一九	八〇	
	延享	一二〇	七九	
	延享	一二一	七八	
	延享	一二二	七七	
	延享	一二三	七六	
	延享	一二四	七五	
	延享	一二五	七四	
	延享	一二六	七三	
	延享	一二七	七二	
	延享	一二八	七一	
	延享	一二九	七〇	
	延享	一三〇	六九	
	延享	一三一	六八	
	延享	一三二	六七	
	延享	一三三	六六	
	延享	一三四	六五	
	延享	一三五	六四	
	延享	一三六	六三	
	延享	一三七	六二	
	延享	一三八	六一	
	延享	一三九	六〇	
	延享	一四〇	五九	
	延享	一四一	五八	
	延享	一四二	五七	
	延享	一四三	五六	
	延享	一四四	五五	
	延享	一四五	五四	
	延享	一四六	五三	
	延享	一四七	五二	
	延享	一四八	五一	
	延享	一四九	四〇	
	延享	一五〇	三九	
	延享	一五一	三八	
	延享	一五二	三七	
	延享	一五三	三六	
	延享	一五四	三五	
	延享	一五五	三四	
	延享	一五六	三三	
	延享	一五七	三二	
	延享	一五八	三一	
	延享	一五九	三〇	
	延享	一六〇	二九	
	延享	一六一	二八	
	延享	一六二	二七	
	延享	一六三	二六	
	延享	一六四	二五	
	延享	一六五	二四	
	延享	一六六	二三	
	延享	一六七	二二	
	延享	一六八	二一	
	延享	一六九	二〇	
	延享	一七〇	一九	
	延享	一七一	一八	
	延享	一七二	一七	
	延享	一七三	一六	
	延享	一七四	一五	
	延享	一七五	一四	
	延享	一七六	一三	
	延享	一七七	一二	
	延享	一七八	一一	
	延享	一七九	一〇	
	延享	一八〇	〇九	
	延享	一八一	〇八	
	延享	一八二	〇七	
	延享	一八三	〇六	
	延享	一八四	〇五	
	延享	一八五	〇四	
	延享	一八六	〇三	
	延享	一八七	〇二	
	延享	一八八	〇一	
	延享	一八九	〇〇	
	延享	一九〇	九九	
	延享	一九一	九八	
	延享	一九二	九七	
	延享	一九三	九六	
	延享	一九四	九五	
	延享	一九五	九四	
	延享	一九六	九三	
	延享	一九七	九二	
	延享	一九八	九一	
	延享	一九九	九〇	
	延享	二〇〇	八九	
	延享	二〇一	八八	
	延享	二〇二	八七	
	延享	二〇三	八六	
	延享	二〇四	八五	
	延享	二〇五	八四	
	延享	二〇六	八三	
	延享	二〇七	八二	
	延享	二〇八	八一	
	延享	二〇九	八〇	
	延享	二一〇	七九	
	延享	二一一	七八	
	延享	二一二	七七	
	延享	二一三	七六	
	延享	二一四	七五	
	延享	二一五	七四	
	延享	二一六	七三	
	延享	二一七	七二	
	延享	二一八	七一	
	延享	二一九	七〇	
	延享	二二〇	六九	
	延享	二二一	六八	
	延享	二二二	六七	
	延享	二二三	六六	
	延享	二二四	六五	
	延享	二二五	六四	
	延享	二二六	六三	
	延享	二二七	六二	
	延享	二二八	六一	
	延享	二二九	六〇	
	延享	二三〇	五九	
	延享	二三一	五八	
	延享	二三二	五七	
	延享	二三三	五六	
	延享	二三四	五五	
	延享	二三五	五四	
	延享	二三六	五三	
	延享	二三七	五二	
	延享	二三八	五一	
	延享	二三九	四〇	
	延享	二四〇	三九	
	延享	二四一	三八	
	延享	二四二	三七	
	延享	二四三	三六	
	延享	二四四	三五	
	延享	二四五	三四	
	延享	二四六	三三	
	延享	二四七	三二	
	延享	二四八	三一	
	延享	二四九	三〇	
	延享	二五〇	二九	
	延享	二五一	二八	
	延享	二五二	二七	
	延享	二五三	二六	
	延享	二五四	二五	
	延享	二五五	二四	
	延享	二五六	二三	
	延享	二五七	二二	
	延享	二五八	二一	
	延享	二五九	二〇	
	延享	二六〇	一九	
	延享	二六一	一八	
	延享	二六二	一七	
	延享	二六三	一六	
	延享	二六四	一五	
	延享	二六五	一四	
	延享	二六六	一三	
	延享	二六七	一二	
	延享	二六八	一一	
	延享	二六九	一〇	
	延享	二七〇	〇九	
	延享	二七一	〇八	
	延享	二七二	〇七	
	延享	二七三	〇六	
	延享	二七四	〇五	
	延享	二七五	〇四	
	延享	二七六	〇三	
	延享	二七七	〇二	
	延享	二七八	〇一	
	延享	二七九	〇〇	
	延享	二八〇	九九	
	延享	二八一	九八	
	延享	二八二	九七	
	延享	二八三	九六	
	延享	二八四	九五	
	延享	二八五	九四	
	延享	二八六	九三	
	延享	二八七	九二	
	延享	二八八	九一	
	延享	二八九	九〇	
	延享	二九〇	八九	
	延享	二九一	八八	
	延享	二九二	八七	
	延享	二九三	八六	
	延享	二九四	八五	
	延享	二九五	八四	
	延享	二九六	八三	
	延享	二九七	八二	
	延享	二九八	八一	
	延享	二九九	八〇	
	延享	三〇〇	七九	
	延享	三〇一	七八	
	延享	三〇二	七七	
	延享	三〇三	七六	
	延享	三〇四	七五	
	延享	三〇五	七四	
	延享	三〇六	七三	
	延享	三〇七	七二	
	延享	三〇八	七一	
	延享	三〇九	七〇	
	延享	三一〇	六九	
	延享	三一〇	六八	
	延享	三一〇	六七	
	延享	三一〇	六六	
	延享	三一〇	六五	
	延享	三一〇	六四	
	延享	三一〇	六三	
	延享	三一〇	六二	
	延享	三一〇	六一	
	延享	三一〇	六〇	
	延享	三一〇	五九	
	延享	三一〇	五八	
	延享	三一〇	五七	
	延享	三一〇	五六	

一七五八 一七五七 一七五九 一七六〇 一七六一	一七六二 一七六三 一七六四 一七六五 一七六六 一七六七 一七六八 一七六九 一七七〇 一七七一	一七七二 一七七三 一七七四 一七七五 一七七六 一七七七 一七七八 一七七九 一七八〇 一七八一
六 七 八 九 〇 一	二 三 元 二 三 四 五 六 七 八	安永 二 三 四 五 六 七 八 九 元 天明
○老子經国字解（金蘭齋）	○老子道德真經（宇惠校訂）江戸、須原屋平助、須原屋茂兵衛 ○老子辨（明陳繼儒評注）、（京）小幡宗左門 ○釈注老子（僧円覺天）（京）錢屋庄兵衛	○老子經国子解（金蘭齋）大増書籍目録 ○老子道德經正訓（戸崎允明）（江戸）西村源六 ○王注老子○字辨（太田子龍）須原屋茂兵衛刊 ○老子王弼注（江戸）須原屋平左門 ○老子正義（有木元吉）太古堂刊
老子道德經校注（服部元喬）	老子辨（釈敬雄） 老子国字辨（小林東山） 老子正訓（戸崎允明） 老子考（〃） 老子問答（〃）	老子玄覽（三野昭元）付言金龜道人 老人兵解（良梁） 老子国字解（井孝雅） 老子抄（滝鶴台） 老子獨狗（山口滄州） 老子古解（大竹鸞） 老子道德經正文（混沌翁） 老子考定（市川鶴鳴） 老子贅語（齋官必簡）

一七八二 一七八三 一七八四 一七八五 一七八六 一七八七 一七八八 一七八九 一七九〇 一七九一	寛政	三二元八七六五四三二	<p>○老子特解（太宰純）（江戸）嵩山房刊</p> <p>○老子正義（有木元吉）（大阪）柏原屋清右工門 老子繹解（皆川淇園）</p> <p>○老子道德經妄言（豊浦懷）</p> <p>○老子道德經解（高橋敏慎）（江戸）小林新兵工（嵩山房）</p>	<p>老子類説（片山兼山）老子類考（〃）</p> <p>老子通義（渋井太室）</p> <p>老子異同考、老子翼解（角田青溪）</p> <p>老子道德經校注（天目偉文）</p>
一七九二 一七九三 一七九四 一七九五 一七九六 一七九七 一七九八 一七九九 一八〇〇 一八〇一	享和	元二一〇九八七六五四	<p>○老子繹解（江戸）武田伝右工門（京）天王寺屋市郎兵工</p>	<p>老子真語（乾長孝）</p> <p>老子古柏（渡辺之望―荒陽）</p> <p>老子解（佐々木世元―琴台）</p> <p>老子評注（桃源白鹿）</p>
一八〇二 一八〇三 一八〇四 一八〇五 一八〇六 一八〇七	文化	四三二元三二	<p>○老子道德經（塚田虎）（江戸）角丸屋甚助</p> <p>○老子經古義（三野元密）</p> <p>○老子經国字解（金蘭斎）（大阪）敦賀屋九兵工</p> <p>○老子道德經発蒙（釈俊国）（京）天王寺屋市郎兵工</p>	<p>老子国字解（海保青陵）</p> <p>老子解（重野櫟軒）</p> <p>老子解（木沢大淵）</p> <p>老子道德經校勘（古屋昔陽）</p> <p>△老子古訓伝（及川達）</p>

一八〇八	一八〇九	一八一〇	一八一	一八一二	一八一三	一八一四	一八一五	一八一六	一八一七	一八一八	一八一九	一八二〇	一八二一	一八二二	一八二三	一八二四	一八二五	一八二六	一八二七	一八二八	一八二九	一八三〇	一八三一	一八三二	一八三三
五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	元	三	四	
○老子經證假字解（高橋閔慎）				○老子解（仁科貞）浪華・定栄堂刊 ○老子王註標識（東條一堂）○老子證解（高橋閔慎） ○老子輻註（葛西因是）										○老子解（重野櫟軒） ○老子道德經集解（西野直方）○老子評注（松本愚山） ○老子證註（中田秀瑩） ○老子全解（太田敦一晴軒）（江戸）浅倉屋久兵衛										○老子道德經考異（清畢元）（江戸）出雲寺万次郎	
△老子解（仁科白谷）				老子解（萩原大麓） 老子一斑（山本北山） 老子国字解（字野東山） 老子考（大菅南坡） △校刻老子註 △老子纂要△読老撮要 老子雕題（中井履軒） 老子考（永井星渚）										老子鑑（鎌田柳泓） 老子臆解（鈴木重宜） 老子玄義（池田冬蔵） 老子妙（太田元貞一錦城） 老子愚説（亀田鵬斎） 老子解意（僧雲室） 老子折中（兼子如風） 老子詳解（中江農民） 老子考（萩原文華） 読老子（佐和淵）											

[illegible]

一八八五	一八八四	一八八三	一八八二	一八八一	一八八〇	一八七八	一八七七	一八七六	一八七五	一八七四	一八七三	一八七二	一八七一	一八七〇	一八六九	一八六八	一八六七	一八六六	一八六五	一八六四	一八六三	一八六二	一八六一	一八六〇	
一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	元	三	二	元	元	三	二	元	元
○老子集説(渡政興) 明治四五年刊 ○老子道德經補註(吉田利行) 林、磊落堂刊 ○老子講義(佐藤楚材) (名古屋) 三輪文次郎													明治 慶応 元治											文久	万延
老子正文(広瀬世叔) 老子述(大江天年、マタ長保井) 老子指掌(加藤桜老)													老子集成(鈴木文台) 老子助字解(真斎) 読老筆記(斎藤拙堂)											老子註解(徳川斎昭)	

一八八六	一九	○評註老子道德經（木山 槐）松山堂刊	老子講義筆記（太田和齋）
一八八七	二〇		
一八八八	二一		
一八八九	二二		
一八九〇	二三		
一八九一	二四		
一八九二	二五	○老子講義（小宮山昌玄）四〇年刊	
一八九三	二六	○老子講義（西村豊）○校註老子道德經（牧野謙次郎）	
一八九四	二七		
一八九五	二八		
一八九六	二九	○道德經臆說（東正堂）	
一八九七	三〇		
一八九八	三一	○老子正釈（大野大衛）	
一八九九	三二		
一九〇〇	三三	○老子講義（大野大衛）四三年 老莊講義として排印○老子講義（島田釣一）	老子十家註（塚田淳五郎）大峯嗣子
一九一一	三四	○老子講義（根本通明）東京・博文館	老子註釈（太田代恆徳）